

## 朝鮮刊本『金鰲新話』の旧所蔵者養安院と蔵書印

——道春訓点和刻本に先行する新出本——

邊 恩 田

### 一 朝鮮刊本『金鰲新話』の出現

朝鮮王朝時代初期一五世紀の梅月堂金時習(一四三五—一四九三)が著した短篇漢文小説集である『金鰲新話』は、日本近世江戸時代において最もよく知られ読まれた朝鮮の文学作品であった。

『金鰲新話』が、朝鮮文学史上最初の小説として高く評価されてきただけでなく、中国の瞿佑の『剪燈新話』を引き継ぐ伝奇小説として比較研究され、また日本近世期浅井了意の『伽婢子』にも受容された作品であることは、すでに先学諸氏の研究成果<sup>①</sup>によって広く知られるところである。

しかしながらその文学史上占める意義の大きさにもかかわらず、惜しくもその原本や伝本はこれまでに確認されず、唯一江戸時代初めに日本で刊行された和刻本の『金鰲新話』が、伝存するだけであ

った。すなわち、承応二年(一六五三)に和刻本の『金鰲新話』が出され、続いて七年後の萬治三年(一六六〇)には刊年を改刻した改刻本が出され、さらにのち寛文十三年(一六七三)には後刷本が出されている。これに終わらず約二百年後の明治時代になつても、明治十七年(一八八四)には大塚家に伝来していた伝本をもとにして新たに版を起こして出された俗称大塚本など、以上数種の和刻本があつて、現在日本や海外の各所に伝存しているのである。そしてこのうち承応二年刊和刻本が、現伝最古の『金鰲新話』として認められてきた。

ところが驚くべきことに、一九九九年九月に新たなる一伝本、それも朝鮮刊本の『金鰲新話』の存在が中国の大連図書館で確認された。新出本については詳細な報告があるが、特に刮目すべきこととして二点が指摘できる。それは編輯者と蔵書印である。すなわち編

輯者の名を「尹春年」（一五一四―一五六七）と明記していることから、該書が十六世紀半ばまでに朝鮮の地で印行されたものであるという、画期的な事実が判明したのである。

さらに重要なのは、養安院の蔵書印が捺されていることであつた。すなわちその一つは、楷書体で「養安院蔵書」とある長方形の印で、いま一つは「菴安」と刻したものであつた。

この蔵書印によつて、桃山時代から江戸時代初めにかけての医者である曲直順正琳（一五六五―一六一一）<sup>③</sup>が、かつて所蔵していた本だといふ事実が明らかとなつたのであり、その結果さらに、前述の和刻本刊行の承応二年（一六五三）よりも相当さかのぼる時期に、すでに朝鮮刊本の『金鰲新話』が日本の地に存在したといふ、まことに重要な事実も判明したわけである。

これまで、和刻本『金鰲新話』の刊行（承応二年）以前に、『金鰲新話』は日本には存在しなかつたとする前提のもとで、『伽婢子』などへの影響・受容の問題等が論議されてきたのであるが、新資料の出現によつて、今後まったく新たな視点に立つて研究が進められなければならない。

では、いついかなる経緯で養安院の所蔵するところとなつたのか、またなぜ二種の蔵書印が捺されているのか、その先後関係はどうであり、蔵書印の意味するところは何かといった特に蔵書印に関心を

よせて、以下考察を進めていくことにする。

## 一 養安院とその蔵書

養安院曲直瀬正琳<sup>④</sup>は、安土桃山時代から江戸時代初期の著名な医師である。「名は又五郎、字は養庵、号は玉翁、永禄八年（一五六五）生まれ。医を曲直瀬正盛に学び、才を認められて嗣子玄朔の娘を娶り、曲直瀬を称した。天正十二年（一五八四）豊臣秀吉に謁し、豊臣秀次に仕え、その後徳川家康の侍医となり、慶長十六年（一六一一）正月四日に四十七歳で没したといふ。

彼が医学を学んだ師の曲直瀬道三（一五〇七―一五九四）は名を正盛、また正慶とも称し、字は一溪で、雖知苦齋または盍静と号し、院号は翠竹院<sup>⑦</sup>である。通称名「道三」として広く知られ、戦国・安土桃山時代の医師として、近世日本における伝統医学の礎を築いたすぐれた人物として高く評価されている。「その跡は、玄朔（今大路家）・正純（亨徳院家）、正琳（養安院家）の三大家系に分岐し、いずれも地位と名声ある子孫を輩出して幕末に至つ<sup>⑧</sup>」ている。

養安院は、道三の孫娘を娶つてこの栄えある曲直瀬家を継いだのち、養安院家の初代として医学発展に大いに貢献したのだが、その栄誉の一つに院号がある。曲直瀬正琳の院号「養安院」が、どういふ来由によりいつから用いられたかについては、「慶長五年（一六

〇〇) 後陽成天皇に薬を献じて効あり、養安院の院号を賜った」ものであり、正琳だけでなく、「その後累代これを襲称し江戸末まで用ひられた」院号であった。

ところで、養安院は、医師としてだけでなく、膨大な量の朝鮮本を所蔵することでもよく知られていた。特に書誌学や朝鮮学研究者には夙に注目される場所であり、中山久四郎氏、三木榮氏、大塚鑑氏、阿部吉雄氏、川瀬一馬氏、藤本幸夫氏などによる先行研究があり、蔵書目録としては、三木氏による朝鮮医書に限定したもの、大塚氏紹介の「養安院蔵書」があり、藤本氏による朝鮮本調査によるものなどがある。

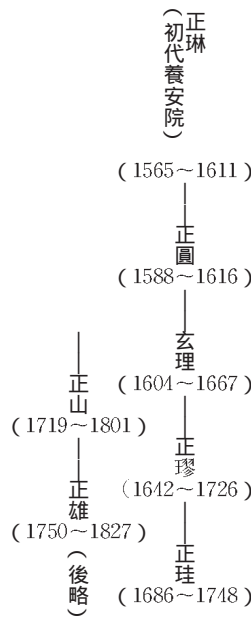
そもそも従来、「養安院蔵書」と呼びならわされてきた蔵書の特質については、

この初代養安院蔵書の根幹を形成するものは、言ふまでもなく朝鮮本であり、唐本もあるがこれには朝鮮に傳つてゐた分も含まれ

るといふ説明があり、「養安院の旧蔵書中に数多い朝鮮古刊本」、また「養安院蔵書」等の印記を捺す朝鮮本の古書が多く残存している」といふ指摘がなされている。

しかし、養安院蔵書といつても、すべてが曲直瀬正琳の時代の所蔵本だけとは限らないこと、左図のように、正琳ののち正圓、玄理、

正璆と数代を経ながら(彼らも「養安院」を襲号している)増加していき、「五代正珪の時凡そ大成したと推定」されていることに注意しておく必要がある。また蔵書は、「享保二年に一部焼失したが、残部が懐仙楼に収まり、又知られない事故によつて散佚したものもあらうが、後代の蒐書に混入して、明治初期まで傳へられた」ものであったという。



小曾戸氏によれば、明治十八年の森立之による『経籍訪古志』の跋文には、次のような記事がある。

府下医中の蔵書家は化政の間(一八〇四—二九)を以て盛となす。而して其の最たる者は二劉と曲直瀬となす。

すなわち、明治十八年(一八八五)の時点ですら、養安院蔵書が、「多紀家すなわち江戸医学館に匹敵する蔵書を誇っていた」ということになり、養安院蔵書がいかに著名でその蔵書量を誇っていたか

が知られるのである。

しかしこのうち、養安院家の蔵書は四散してしまつたようである。そして今日となつては、『懐仙楼書目』『経籍訪古志』所録本、国立公文書館内閣文庫・宮内庁書陵部・台湾故宮博物院図書館・北京大学図書館・武田杏雨書屋などに現存する旧蔵本を調査することによつてその旧観を偲ぶことができる<sup>16)</sup>のである。

では、なぜ養安院のもとに、これほど多量の朝鮮本が所蔵されていたのであろうか。

### 三 養安院蔵書と朝鮮本

江戸時代後期の文人、小山田與清（一七八三―一八四七）が著した随筆『松屋叢話』には、自らの所蔵する書籍についてあれこれと述べる一文があり、そのなかに次のような文句が見えていて非常に興味深い。

また三略直解一本、六韜直解一本、ともに四百年ばかりもむかしに寫したらんと見ゆるをもてり。三略のかたは、曲直瀨氏の蔵本なる、加藤清正の朝鮮分捕本を、清水徳がかり得て示たりしに、つゆたがふふしなし。（巻一）<sup>17)</sup>

曲直瀨氏（養安院家）が朝鮮本を数多く所蔵していること、そしてそれらが朝鮮の地からの分捕本であつたという事実は、ひと

り文人小山田だけの理解ではあるまい。こうした理解は、実は江戸時代を通じて巷間のよく知るところであつたらしく、それは今日にまで伝わつていたのである。これについて先行研究では、

これらの書籍は秀吉或は宇喜多秀家より贈られたもので、壬辰役時朝鮮から將來した船数艘或は笥數十或は車数台或は数千巻と云はれる量を有し<sup>18)</sup>

と説き、あるいは

養安院本というのは、宇喜多秀家が朝鮮より船載した朝鮮本、唐本を、豊臣秀吉より曲直瀨正琳に與えられたものである<sup>19)</sup>。

とも説明していた。

文献記録としては、三点にその記載を確認することができた。まず、明治二年（一八六九）に養安院の門人が書写した一冊「官医家譜」には、

法印文祿四年中納言宇喜多秀家室怪疾ヲ煩候諸医療治仕候得共  
驗無之正琳診脈投劑仕早速全快秀吉ヨリ爲謝礼錦衣金銀ヲ賜且  
秀吉朝鮮ヨリ持来候数車之書籍悉ク賜<sup>20)</sup>

という記事が見える。「数車之書籍」だと、その量について記している。

さらに「官医家譜」に先行する文献に、江戸幕府編纂になる諸大名等の系譜『寛政重修諸家譜』（文化九年成立）の記事がある。正

琳の項には、

四年宇喜多秀家の室怪異の病ありて諸醫これを治する事あたはず、正琳薬をあたへて瘳る事を得たり。太閤これを感じて綿衣、金、銀數多をたまふ。また太閤朝鮮にをいて搜りもとめしところの書籍をことごとくあたへらる。これよりして其名いよ

くあらはる。

と記録している。さらに遡る文献、寛文三年序刊黒川道祐著の『本朝医考』(巻中)には、

(文禄)四年、中納言宇喜外秀家卿之内室并豊臣秀吉公之女患怪疾、諸医治之、不驗。正琳献薬而立痊。秀吉公悦之、賜綿布并金銀。且秀家卿自朝鮮携来之書籍悉昇之。<sup>27)</sup>

とあって、ここには、宇喜多秀家が朝鮮より携え来た書籍を悉く与えた、と説明している。

以上、資料間に表現上若干の相違はあるものの、つまるところ、朝鮮の地に渡ったのは宇喜多秀家であり、秀家が朝鮮から持ち帰った文物(書籍など)を秀吉に戦利品として報告したものに相違ないだろう。

宇喜多秀家といえは、秀吉の寵寓を得て全幅的な信頼のあつた武将であり、秀吉の名の一字「秀」の使用を許され息子ともしたほどの人物であり、右引用の記事に「室」や「内室」とあるのは、いう

までもなく豪姫のことをさす。豪姫はもとも前田利家の四女として生まれたが、子のない秀吉の養女として大切に育てられたことは周知のことであつてみれば、宇喜多秀家に娶らせた娘豪姫の怪疾を治してくれた医者の曲直瀬正琳に、格別の謝礼を渡したというのも、充分にうなずけることである。

「豊臣秀吉の証明の野望から惹起された壬辰倭乱は、朝鮮の人々を泥炭の苦しみに落とし入れ、多数の人々を殺害・拉致し、また文物を破壊・掠奪した」のであつたが、その「掠奪物の一つに、朝鮮本や活字があつた」ことは、周知のことである。その量たるや、「数車之書籍」、「数千巻」、あるいは「朝鮮ニ於テ収獲スル所ノ書數十筒」(『醫家先哲肖像集』)<sup>28)</sup>などと諸資料に記しているのは、決して誇張ではないだろう。壬辰・丁酉の倭乱時に、漢城(現在のソウル)の都だけでなく各地の著名な書院・書庫が空になつたと伝わっているからである。

たしかに、宇喜多秀家は、文禄元年(一五九二)四月、「第一次朝鮮侵略(文禄の役)<sup>29)</sup>」の時に、秀吉の兵として宇喜多軍一万兵士を率いて朝鮮へ攻め入り、五月三日の漢城陥落のあと、都のある京畿道を任された元帥であるので、おそらくこの頃に掠奪し日本に持ち帰つたものであることは肯けよう。してみれば、養安院旧蔵としてあつた『金鰲新話』は、都か京畿道地域のいずこかに所蔵され

ていたものであったという推測が可能となる。

#### 四 道三と朝鮮の書籍

ただ、養安院の師である初代道三（正盛）は、若き頃足利学校に学んだ人物であって、この

学校の出身者が、当時の武將の軍事顧問として近侍し、且つ従軍したがために、朝鮮の役においては、彼の地の文物を盛んに将来し、活字印刷術の如きも亦、彼の地の多数の典籍と共に輸入せられて

いるという指摘は、注意しておく必要がある。初代道三と足利学校出身者とのつながりが強いことにてらせば、文禄四年（一五九五）時に宇喜多秀家から養安院へ渡ったルート以外に、もともと道三が所蔵していた朝鮮の書籍が養安院のもとに収蔵されることも、充分想定できる。

また旧稿<sup>27</sup>ですでに指摘したところであるが、二代目道三こと曲直瀬玄朔も、文禄元年に朝鮮に渡っている事実があり、やはり見過ごせない。玄朔（一五四九—一六三二）は、道三の妹の子であったが養嗣となり、天正十一年十一月に道三を継いだ医師であるが、玄朔は、天正十五年、「秀吉の島津征討に従い、豊前国小倉にあって毛利輝元の下痢下血を治療。文禄元年（一五九二）秀吉の征明軍に従

って肥前国名護屋へ向かい、さらに毛利輝元の療治のため秀吉の命により渡韓、翌年帰国し」<sup>28</sup>でいるという。

道三などが朝鮮の役に際し、武將等に彼の地の多くの古書典籍を齎し歸る様要請したと傳へられてゐる<sup>29</sup>

という指摘があるように、当時の医師は書籍を得ようと相当努めたようである。むろん医師だけでなく、「島津・毛利などの諸侯も亦多数の朝鮮本を持ち帰っ」<sup>30</sup>ているし、「安国寺恵瓊の如きも文禄元年六月釜山より芸州安国寺へ宛てた書簡の中に「朝鮮大唐入御手、書籍内伝外伝、其外宝物、船に積候て各へ可遣候」と言つて」<sup>31</sup>いるとされるごとく、僧侶たちもまた大量の書籍を日本に送っていたのである。

ところで、『寛政重修諸家譜』の玄朔の項には、より詳細に彼と朝鮮本とのかわりについて記している。

文禄元年太閤にしたがひて肥前國名護屋の陣營に至るところ、朝鮮先鋒の土その國の文庫より書籍あまた奪ひ來たりし中に、父正盛が自筆の啓迪集一部を得たり。

とあるのがそれである。この記事から、文禄元年に、玄朔が九州の地で、朝鮮から持ち帰っていた大量の書籍を直接手にとつて見て、内容を検索していたという事実が知られる。むろんこの時以外に、直接朝鮮へ渡った時にも彼は人手できたはずで、人手しなかつたと

見るのがむしろ不自然であろう。

このように見てくると、二代目の道三(玄朔)が手に入れた書籍が、正琳(養安院)の手元へ入り所蔵されるというルートもあつたことを、指摘しておきたい。なぜなら玄朔にとつて、正琳(養安院)は婿にあたる人物になるからである。

とまれ、大連図書館蔵旧養安院蔵書である朝鮮刊本『金鰲新話』は、以上見てきたように、文禄四年(一五九五)には秀吉(と秀家)から手に入れたと判断できること、そのほかに初代道三や二代目道三(玄朔)から貰い受けるという可能性もあつたことを、指摘しておきたい。

## 五 養安院の蔵書印

しかしながら、ここで注意を喚起しておきたいのは、曲直瀬正琳が膨大な量の朝鮮本を収蔵した文禄四年(一五九五)の時点においては、彼にはまだ「養安院」の院号がなかったという事実である。これをふまえておかなければ、彼の蔵書印についての正しい認識は得られないし、またこのことは、蔵書印三種の先後関係を判断する上で、重要な手がかりとなるものだからである。

先述のように、朝鮮刊本『金鰲新話』に捺された蔵書印記は、「養安院蔵書」と「菽安」であるが、この二種の印記の由来や先後

関係、歴史的意味については、まだ解明がなされていないので、筆者はこの点について以下明らかにしたい。

さて、正琳が「養安院」という院号を用いることができたのは、先に指摘したように慶長五年(一六〇〇)の四月二十六日からのことであつた。先掲の『寛政重修諸家譜』にはその由来について、次のように記している。

慶長五年四月二十六日後陽成院御不豫のとき御薬を献じ、すみやかに御平 ありしかば、叡感のあまり論旨を下され、院號をたまふ。

したがって、彼が「養安院」の蔵書印を使うことができたのも、この時以降だということになる。数多くの朝鮮書籍を手に入れた文禄四年からは、約五年後のことである。すなわち、

文禄四年(一五九五) 宇喜多秀家の夫人の奇疾を治し書籍を秀吉より賜る

慶長五年(一六〇〇) 四月、後陽成天皇より「養安院」の院号を賜る

この間の約五年のあいだは、そもそも「養安院」という院号を刻した蔵書印を用いることはできなかったし、また存在すらしなかつたという結論になる。

となると、この期間、彼は何かほかの蔵書印を用いたに相違ない。

なぜなら、曲直瀬正琳ほどの人物、文禄元年（一五九二）に正親町院より法印に叙せられ、医師としても確固たる名声と地位を固めていた彼ほどの人物が、書籍の入手が非常に難しかった当時の時代的状况（羅山でさえ慶長八年頃書籍の入手が困難で人から借覧している）にてらし、まして当時珍重されていた朝鮮本（中国の漢籍本も含む）を、秀吉より下賜されたにもかかわらず所蔵印もいままに捨て置いていたとは、到底考えられないからである。

したがって筆者は、この時期に使われていたのが「菟安」の蔵書印であろうと考える。これは先行研究において「古印」と呼ばれていたものであるが、古印とするだけで具体的な使用の時期などについてはふれられてこなかった。

現在のところ報告されている曲直瀬正琳の蔵書印には、次の三種がある。（渡辺守邦・後藤憲二氏編『新編蔵書印譜』<sup>34</sup>より引く。便宜上ABCを付す）

さて、これら三つの印文を注意深く検討するならば、刻された文



A



B



C

字から見て、Bの「菟安院」印とCの「養安院蔵書」印の場合、それぞれ「院」とあることから、当然慶長五年（一六〇〇）四月二十六日以降に使用されたことは間違いない。しかしAには、「院」字がないので、当然院号を得る以前の古い時期のものとなる。印文に「養」ではなく「菟」の字、すなわち養の古体の字を用いている点も、この判断を傍証する。「菟安」は、曲直瀬正琳がいまだ「養安院」号をなれる前の古印記となる。『内閣文庫蔵書印譜』の解説に、「正琳には別に「養安」「養安院」の古印記があると聞く」とあるのは、このA印とB印を指すものであろう。

Aの絵柄を見るに、足があるので鼎のようであり、また壺のようにも見えるが、持ち主が医者であることから考えるに、薬を入れたり煮たりする容器を印記に用いたと察せられる。

ところでBの場合は、「院」字があることから慶長五年四月以降ではあるものの、Aと同じ古体字「菟」を用いた点から推すならばCよりは古いものと判断できよう。つまりCの長方形印が、時代的にはもつとも後のものだということになる。実際この印については、



曲直瀬正琳の「養安院蔵書」なども江戸中期以降に摹造して使用されているから、蔵書印だけでうつかり手沢本ときめてしまうことも出来ない場合がある。<sup>34)</sup>

という指摘があり、また「江戸中期からおそくは寛政年間刊本に押した例が、かなり多」く、「正琳以後曲直瀬家歴代の襲用したものの」ともいわれているように、三種のなかではもっとも新しく、後代にまで永く用いられた蔵書印であった。

以上の考察から、旧養安院蔵の朝鮮刊本『金鰲新話』は、まず古印のA「菟安」印が最初に捺され、この上部位置にある長方形楷書体の「養安院蔵書」朱印が捺された時期は、慶長五年四月よりは後のことになり、この二種の印記の先後関係と年代が知られるのである。

## 六 古蔵書印「菟安」の意味するもの

ところで、この「菟安」という字については、若干気になる点がある。「菟安」というのは、キリスト教信者であることと関係がないだろうかということである。字音の発音「ヨウアン」が、洗礼名（たとえば「ヨハン」など）と、関係がないかという疑問がわく。「養」の古字である「菟」は、「ひつじ」扁の字であることなど、穿った見方かもしれないが、神への生け贄の羊をも連想させ

てしまうからである。

しかしながらこの考えは、まったく根拠のないことではない。というのは、養安院の師である曲直瀬道三は、すでに天正十二年（一五八四）に洗礼を受けていたからであり、翌年天正十三年（一五八五）には、曲直瀬正琳もまた受洗していたからである。

堀勇雄氏は、「曲直瀬玄朔（道三）の養父の道三（正盛）は天正十二年受洗した有力な信徒であり」といわれ、矢数道明氏も、初代道三は「一五八四（天正十二年）七十八才 神父オルガンチノより洗礼を受け、ヤソ教に帰依した」と指摘されている。また宗田一氏も、「フロイスの『日本史』や『イエズス会日本年報』に道三の入信記事があり、七十七歳で洗礼を受けたとされるが、日本側の記録は知られていない。」<sup>35)</sup>といわれている。

たしかにルイス・フロイスがイエズス会総長に宛てた書簡の「一五八五年八月二十七日付」には、道三が大坂教会でロレンソから洗礼を受けたことについてのかなり詳細にわたる記述が認められた。やや長文であるが次にその一部分を引いてみる。

日本の六十六カ国にいるすべての医師の中で、もっとも優れた者が三人都在るが、これら三人の中で第一の者は（曲直瀬）道三と呼ばれた。この人は医術において傑出している外に、他に稀な才能があり、このため日本の君侯たちに尊重され崇拜さ

れており、どこに行こうと常に第一の席が与えられる。……(中略)……彼は洗礼を受けたたいと繰り返し頼むので、オルガンティーノ師がこれを行ない、彼にベルシヨールという洗礼名を付けた。道三は、感謝を示しつつ洗礼を受け、大いに満足して喜び、…(後略)

またシユタイシエン著の『切支丹大名記』にも、

秀吉の侍醫で、名醫といふ評判の高かつたイマオジ・ドウサンも、切支丹となつた。彼は秀吉をして、切支丹宗門に、好意を持たしめんがために、あらゆる運動をした。その他、数多著名の人々が、同じく新改宗者の列に加はりたといふ希望を述べた<sup>①</sup>。

と書き留めている。ただ、日本ではこのうち、秀吉の伴天連追放令が出て信者に対する弾圧が始まつたためであるうが、記録はほとんど残されなかつたようである。

なるほど天正期といえば、中世において最もキリスト教が広まつた時期であり、高山右近をはじめ小西行長など、武將の間にも信者が多かつたことはよく知られる。ことに道三が受洗した前年の天正十一年は、「耶穌の年」と呼ばれている。この年に高山右近と宣教師オルガンチノが秀吉に嘆願して大坂に教会堂が建ち、名ある武将をはじめ多くの貴賤男女がキリシタンとなつたが、ことに、「天下の

名医の受洗は1万名以上の改宗に匹敵するといわれ、躊躇していた多くの知識人が入信した」といふ。

以上述べてきたところの関連事項を列記すると次のようになる。

天正十二年(一五八四)十一月頃初代道三が大坂教会でロレンソから洗礼を受ける

天正十三年(一五八五)曲直瀬正琳もキリスト教に入信、受洗する

文禄 元年(一五九二)正琳、十二月法印に叙せられる

文禄 四年(一五九五)宇喜多秀家の夫人の奇疾を治し書籍多数を秀吉より賜る

慶長 五年(一六〇〇)四月、後陽成天皇より「養安院」の院号を賜る

そもそも「安」の漢字は、当時の信者らが受洗名などの西洋名を表すのに用いた字であるふしが強い。たとえば、日本人最初のキリシタン伝道書『妙貞問答』を著し、のち背教したという不干齋ハビア<sup>②</sup>ン(もと僧侶惠春)は、「巴鼻庵」と「庵」の字をあてるものの、キリシタンで著名な小西行長の家臣で小西飛驒守如安と呼ばれていた内藤如安は、「安」の字をあてている。また、村山等安(又は等庵とも)も、長崎の大商人であり代官であつたが、キリシタンがため元和五年に処罰された人物であるが、やはり「安」の字を使つてい

る。さらに慶安なる人物は、外科医として有名な慶安のことらしいというが、彼も「元和四年にヤソ教を信じる故を以て獄に繋られた」人物であった。

これらの事例を鑑みれば、古印「菟安」印についての筆者の考えも、あながち的外れではないだろう。曲直瀬正琳が、字名を菟安」とした背景には、彼の受洗という事実がかかわっているのではないかと筆者は考える。したがって、蔵書印「菟安」の使用時期も、天正十三年を過ぎての頃からかと推察できそうである。

以上、考察を加えてきたが、養安院の蔵書印には、「菟安」、「菟安院」、「養安院蔵書」の三種類があつて、このうち「菟安」印が最も古く、曲直瀬正琳が洗礼を受けたという天正十三年頃から、「養安院」の院号を用い始めた慶長五年四月までの時期に、所蔵した書籍に捺したものと判断できる。

したがって朝鮮本『金鰲新話』にある「菟安」印記も、この期間のある時に曲直瀬正琳の所蔵となつて捺されたものと、考えられるのである。

注

① 松田修（昭和二十七年近世文学会京都支部例会発表）、「仮名草子とその作家たち」、日本近世文学の成立、法政大学出版局、昭三八、宇佐見

喜三八、和歌史に関する研究（若竹出版、昭二七）、佐藤俊彦、剪燈新話と伽婢子及び金鰲新話の比較研究、『朝鮮学報』一三輯、昭和三七）、玄昌履、伽婢子と金鰲新話、比較文学研究、第三、昭三五、鄭崎錦、『金鰲新話』と「伽婢子」における受容の様態、『朝鮮学報』六八輯、昭四八）、江本裕「解説」（『伽婢子』2、平凡社、昭六二）等。

② 崔溶澈「金鰲新話」朝鮮刊本の発掘とその意義、『中国小説研究會報』第三九号、一九九九、九、ソウル。

③ 邊恩田「朝鮮刊本『金鰲新話』発掘報告の紹介と成立年代」、『朝鮮学報』第一七四輯、平成十二、一、筆者は、新出本の特質を和刻本と対比して四点指摘しその成立年代を考証した。

④ 養安院曲直瀬正琳や道三については、矢数道明「日本医学中興の祖曲直瀬道三」（『漢方の臨床』九、十一・十二合併号）と、小曾戸洋「曲直瀬養安家の人々」（『漢方の臨床』三四・二二号）に詳しく、本稿も多くを負っている。

⑤ 矢数道明「曲直瀬正盛」項（『国史大事典』・吉川弘文館、昭五五）。

⑥ 阿部吉雄「日本朱子学と朝鮮」、『東京大学出版会、一九六五、一八四頁の注⑤。

⑦ 注⑤。

⑧ 注④の小曾戸氏論考、八七頁。

⑨ 小曾戸洋「曲直瀬正琳」項（『国史大事典』・吉川弘文館、昭和五五）。

⑩ 三木栄「養安院蔵書中の朝鮮医書」、『朝鮮学報』第一輯、一九五一、五、二六三頁。

⑪ 中山久四郎「東京文理大所蔵朝鮮活版養安院本に就きて」（『史学及東洋史の研究』賢文館、昭九）、三木栄（注⑩の論考）、大塚鑑「鮮籍備忘―附養安院書目―」（『朝鮮学報』第四八輯、昭四三）、川瀬一馬「増補古活字版本の研究」（昭四二）、阿部吉雄（注⑥書）、藤本幸夫「東京教

育大学蔵朝鮮本について」(『朝鮮学報』第八一輯)同「宗家文庫蔵朝鮮本に就いて」(『朝鮮学報』第九九・百輯)同「大東急記念文庫蔵朝鮮版について」(『かがみ』二二・二二二)の目録に散見できるもの。

- 注⑩、二六五頁。
- ⑬ 注⑪の川瀬氏。増補古活字版本の研究』一五一頁。
- ⑭ 同右、七四三頁。
- ⑮ 注⑩、二六五頁。
- ⑯ 注④の曾戸氏論考、一〇二頁、附。
- ⑰ 關野真吉、日本の隨筆に散見する朝鮮本』、『書物同好会会報』八号、昭一五、一三七頁。
- ⑱ 注⑩、二六五頁。
- ⑲ 注⑥、五一六頁。
- ⑳ 注⑩、二六六頁。
- ㉑ 『新訂寛政重修諸家譜』続群書類従完成会、昭三九。
- ㉒ 神鷹鑑、朝鮮銅活字本「白氏策林」について』、『朝鮮学報』一〇六輯、五八頁の註<sup>18</sup>。
- ㉓ 藤本幸夫、印刷文化の比較史』、『アジアのなかの日本史VI』、東京大学出版会、一九九三、二二六頁。
- ㉔ 藤浪剛一、醫家先哲肖像集』、国書刊行会、昭五二、五六頁。
- ㉕ 北島万二、文禄・慶長の役』項(『国史大事典』、吉川弘文館、昭五五)。
- ㉖ 川瀬一馬、足利学校の研究』、講談社、昭四九、二〇七頁。
- ㉗ 注③、一五三頁、注<sup>16</sup>。
- ㉘ 小曾戸洋、曲直瀬玄朔』項(『国史大事典』、吉川弘文館)。
- ㉙ 注⑬、七四三頁。
- ㉚ 注⑬、五一七頁。
- ㉛ 注⑬、一五二頁。

朝鮮刊本『金鰲新話』の旧所蔵者養安院と蔵書印

注②。  
⑳ 渡辺守邦・後藤憲二編、新編蔵書印譜』、青裳堂書店、平成二三、四五三頁。

- ㉑ 注⑥、五一七頁。
- ㉒ 『内閣文庫蔵書印譜』、内閣文庫、昭和四四、七八頁。
- ㉓ 小野規秋、日本の蔵書印』、藝文社、昭二九、一〇三頁。
- ㉔ 堀勇雄、林羅山』、吉川弘文館、昭三九、一二二頁。
- ㉕ 注④、矢数氏論考、二〇頁。
- ㉖ 宗田一、曲直瀬道三』項(『日本史大事典』、平凡社、一九九四)。
- ㉗ 松田剛一監訳、十六・七世紀イエズス会日本報告集』、同朋社出版、一九八七。
- ㉘ シュタイシエン著・吉田小五郎訳、切支丹大名記』、大岡山書店、昭五〇、一〇〇頁。但し訳者は「イマオジ」について不詳とされるが、これは「今大路」のことであり曲直瀬家が分岐した道三の家号の名である。
- ㉙ 『日本キリスト教歴史大事典』、教文社、一九八八、「曲直瀬道三』項(松田毅一氏執筆)。
- ㉚ 注③、一〇八頁。
- ㉛ 江宮隆之氏は、「如安は本名は内藤忠俊、もと丹波国八木城主であった。足利義昭に忠誠であり続けた人物だが、如安という名は、切支丹に受洗して「ドン・ジョアン」という洗礼名を授かって以来、「如安」の字をあてて通称としてきた」と説かれる。(『小西行長』、PHP文庫、一九九七、三七〇頁)
- ㉜ 注③、三九五頁。
- ㉝ 注⑥、八八頁。

付記・本稿は、韓国古小説学会主催の二〇〇一年度夏季国際学術大

朝鮮刊本『金鰲新話』の旧所蔵者養安院と蔵書印

会（於中国延边科学技术大学・七月九日）において発表（韓国語）したものによる。